

令和 2 年 6 月 29 日現在

機関番号：32630

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K13428

研究課題名(和文) 亡命期デーブリンの自然哲学

研究課題名(英文) The Natural philosophy of Doebelin in his exile period

研究代表者

時田 郁子 (Tokita, Yuko)

成城大学・文芸学部・准教授

研究者番号：60757657

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：デーブリンの亡命期(1933-1946)に重点を置き、長編小説『アマゾン』と『1918年11月』を主たる研究対象にして、彼の自然哲学の展開を考察した。彼が自然哲学の着想を得たきっかけは、伝統的ユダヤ人の敬虔さを見聞したことにあり、彼の自然哲学は宗教に深く結びつく。亡命期に彼は無神論の立場からユダヤ教に近づき、カトリックの洗礼を受けたが、そうした伝記的事実は作品に直接反映してはいない。彼の自然哲学は『アマゾナン』で近代の宇宙像を、『1918年11月』で中世の神秘主義と20世紀の生活改善運動の世界像を組み込んで発展したと判明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

20世紀前半のドイツ語圏では神秘思想が興隆したが、その理由は、ユダヤ人の台頭に伴うユダヤ神秘思想の普及と従来考えられてきた。本研究は、自らユダヤ人であることに疑問を持ち独自の自然哲学を展開したデーブリンの思想的土台を探ることにより、彼の作品において近代の宇宙像、中世の神秘主義、20世紀初頭の生活改善運動に見られる自然賛美が自然哲学に組み込まれていることを突き止めた。通常この三つは個別に考察されてきたが、本研究はこれらを結びつけてヨーロッパの自然観を考える意義を提起するものである。

研究成果の概要(英文)：Setting the work of Alfred Doebelin, "Amazonas" and "November 1918", as the research target, which are written in his exile period (1933-1946), the development of his natural philosophy is considered. He hit a conception of natural philosophy, as he saw in his journey to Poland, how Jewish piously live. Accordingly it must have connection with his religious situation. Doebelin as Atheist got closer to Judaism first in his exile period and then got baptized in the Catholic Church. But this biographical fact doesn't seem to reflect in his literary works. It turns out that he incorporated the Modern Cosmology in "Amazonas" and the Medieval Mysticism and the life improvement movement in the 20th century in "November 1918" into his natural philosophy.

研究分野：ドイツ語ドイツ文学

キーワード：自然哲学 亡命文学 神秘思想

1. 研究開始当初の背景

二十世紀前半のドイツ語圏では、近代的な合理主義が行き渡る一方で、神秘思想の興隆が見られた。その理由として、まず合理主義への反動、次いでユダヤ系知識人の台頭による新たな思想的土壌の形成が考えられる。ジークムント・フロイトの精神分析、ホーフマンスタールの『手紙』(1902)を皮切りにする、マウトナー、クラウス、ベンヤミン、ヴィトゲンシュタイン等による言語批判、表現主義やダダイスムによる言語実験もまたユダヤ系知識人によるもので、既存の社会や秩序、言語観に疑問を投げかけ、新しい価値観を創出しようとする試みであった。本研究が対象とするアルフレート・デーブリーンは表現主義運動の一員として頭角を現した文学者である。表現主義運動の土壌となった場所はカフェで、分野を異にする芸術家や知識人はここで隔たりなく語り、問題意識を共有した。彼らが関心を寄せたのは、カバラや神秘主義、新プラトン主義であり、これらの思想は自然を理解しようとする人間の知的営為の成果である。従来自然に寄せる関心は「自然学」と呼ばれており、十九世紀に入って学問の専門化が始まると、自然科学と錬金術、哲学と神秘主義などと区分され、前者が正統な学問になり、後者は秘教と化した。しかし、後者の神秘思想への関心は絶えることなく、二十世紀前半に顕在化し、芸術運動の拠り所になったと考えられる。

本研究はデーブリーン文学を手がかりとして、二十世紀前半のドイツ語圏において神秘思想が興隆した理由とその展開を探るものである。デーブリーンは文学作品の中で、精神と身体の不均衡に悩む人間模様と「新しい人間」の誕生を繰り返し描き、壮大な宇宙観を展開して、神秘思想の近代的復興に活路を見出した。彼が「自然哲学(Naturphilosophie)」と言い表した思想の核には神秘思想が存する。神秘思想および前衛芸術の担い手の多くはユダヤ系知識人であり、彼らは全体主義の台頭と共にドイツ語圏の表舞台から姿を消したため、神秘思想もまた自然消滅したように見える。だが、デーブリーンは亡命中も精力的に文学活動に邁進し、この間に彼の自然哲学が発展した。そこで亡命中の彼の動向に照らし合わせて、自然哲学の展開を考察する必要がある。

2. 研究の目的

本研究の目的は、亡命期のデーブリーンの活動に焦点を当て、作品分析を通して、「自然哲学」の展開を追うことにある。主たる考察対象は、長編小説『アマゾン (Amazonas)』(1937/38)と『一九一八年十一月 (November 1918)』(1939/47/49/50)である。

まず、デーブリーンの作品ごとに内蔵された宇宙像を比較検討して、彼の「自然哲学」の特徴を明らかにする。彼の「自然哲学」は、古代ギリシアの自然哲学の流れを汲み、マクロコスモスとしての「宇宙/世界」とミクロコスモスとしての「人間」が照応するという考えに基づいて、人間のあり方を問うものである。『アマゾン』ではコペルニクスやブルーノ、ガリレイといった近代宇宙像の立役者たちが登場するため、デーブリーンが宇宙像の革新とヨーロッパ人の新大陸との出会いを同一物の別の現れと見なしていると考えて、その意味を考察する。

次いで、デーブリーンがユダヤ人として亡命せざるをえなかった伝記的事実を、他のユダヤ人たちの例と比較して、伝記的事実が作品内にどう反映しているかを考える。二十世紀前半の神秘思想の担い手の多くはユダヤ人であり、彼らは反ユダヤ主義に直面して、シオニズム運動へ身を投じたり、亡命を選ぶ者もあった。デーブリーンは幸運にも、スイスとフランスを経てアメリカ合衆国へ亡命することができた。彼の「自然哲学」はこの時期に発展するため、亡命期を二つに分けて、彼の宗教上の変遷を追い、信仰の問題を考える。彼はユダヤ教の家庭に生

まれたが、1912年にユダヤ教会から脱退し、既存の宗教に距離を置いていた時期に自然哲学を構想し始めた。その後、亡命の前半(1933-1940)にパリでユダヤ教に接近し、後半(1940-1945)にロサンゼルスでカトリックに改宗していることから、亡命期の彼にとって信仰は重要な問題であったとわかる。長編小説『アマゾン』においてイエズス会士たちの南米での活躍を描いたことが彼のカトリック入信に繋がったとの仮説を立てることができるため、『アマゾン』におけるカトリックと『一九一八年十一月』における神秘主義の描かれ方を分析し、デーブリーンの宗教観を解明する。

3. 研究の方法

デーブリーン作品内における自然に纏わる言説を、ドイツ精神史における自然観と比較検討する方法を取る。彼は自然を外なる自然と内なる自然に分ける。外なる自然は人間の外部に広がり、「自然学/物理学(Physik)」の対象になる。十九世紀初めの古典主義やロマン主義の作家たちは「自然学」に強い関心を抱いていた。デーブリーンは彼らの作品を積極的に受容したため、彼が執筆した作品だけでなく彼が読み込んだ作品も考察対象にして、彼の「自然哲学」を解明する。その際に、1)内なる自然、2)外なる自然、3)内なる自然と外なる自然の媒介、の3つの観点から考察を進める。

1)内なる自然は人間の「心/精神」であり、精神科医であったデーブリーンが文学活動を始めた当初最大の文学的主題であった。デーブリーンが好んだ作家の一人であるハインリヒ・フォン・クライストの作品における「心/精神」の問題を考察して、クライストの「心/精神」の考え方がデーブリーン文学に影響を及ぼしていることを明らかにする。

2)外なる自然は人間の外部に広がる。『アマゾン』では南米のジャングルがそれに相当するため、ジャングルの中でヨーロッパ人が格闘する様子を分析する。『アマゾン』第三部で近代の大都市が「新たなジャングル」になったと記されることを踏まえると、『一九一八年十一月』はまさに「新たなジャングル」を舞台にした作品である。作品末で主人公が放浪の予言者になるのは、内なる自然と外なる自然の照応の体現者として考えられているためである。放浪の予言者は生活改善運動の有力人物を連想させるため、生活改善運動について調査する。

3)内なる自然と外なる自然を繋ぐ存在として、上述の放浪の予言者に加えて、人造人間が考えられる。人間を人工的に作ることは人類が古来抱いてきた夢であり、さまざまな伝説で人造人間について語られてきた。それは二十一世紀のロボットやAI、生命科学に繋がる問題でもある。デーブリーンは『海と山と巨人』(1924)において人造人間を何通りも描いており、他の諸作品で描いた「新しい人間」像も人造人間の伝統に則っている。彼の特徴は人造人間をイメージする際に科学技術を念頭に置く点にある。ヨーハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテが『ファウスト』第二部でホムンクルスの誕生と消滅を描く際に、ホムンクルスを従来の子のこびとのイメージから切り離し、近代科学の申し子としたことを踏まえると、デーブリーンがゲーテを参照して、内なる自然と外なる自然を科学の力に結びつけたと考えられる。

4. 研究成果

デーブリーン作品の分析を通して、ドイツ語圏の「自然」観が時代に即した形で受け継がれていると判明した。内なる自然、外なる自然、内外の自然の媒介といった補助線を引くと、これらが絡み合っただデーブリーン的神秘思想を作り上げていると判明する。

1) 内なる自然

デーブリーンの初期短編集『タンポポ殺し』の分析を通して浮上した、身体と精神の不均衡

という問題を考えるため、時代を遡って、十八世紀末から十九世紀初頭にかけて一世を風靡したメスメリズムの文学的展開を調査した。具体的にはクライストの『ハイルブロン少女ケートヒェン』と E.T.A. ホフマンの諸作品を分析した。クライストに関しては論文にまとめつつある。メスメリズムは、医師であるアントン・メスマーがマクロコスモスとミクロコスモスの照応を前提とする中世以来の医学に基盤を置いて考案した治療法であるが、次第に発案者であるメスマーの手を離れ、当時着目され始めた電気や磁気のイメージを取り込んで、独自の発展を遂げた。メスメリズムはその後フランスで催眠術として発展し、十九世紀後半にパリに留学して催眠術を学んだフロイトにより精神分析へ受け継がれる。この図式から、旧来の自然観がメスメリズム、催眠術、精神分析を介して二十世紀前半に顕在化したと判明する。

2) 外なる自然

デーブリーンは数多くの作品の舞台を大都市にしたが、それは大都市を外なる自然すなわち現代のジャングルと捉えたためである。『アマゾン』では、ヨーロッパ人がアメリカ大陸や宇宙といった外なる自然との格闘を繰り広げるが、その後、自然との格闘は内面化され、大都市での人間関係が問題となる。時代が下るにつれ、内と外の自然を対照的に捉える見方は無効になり、自然の再考が促される。『アマゾン』におけるこの点を論文にまとめた。

3) 内なる自然と外なる自然の媒介

二十世紀前半には「新しい人間」というモチーフが流行した。これは従来ニーチェの「超人」を真似たものと理解されてきたが、むしろ人造人間の系譜を受け継いでいる。人造人間は、旧約聖書では塵から作られたアダム、ギリシア神話ではピュグマリオンが作る大理石の乙女、ユダヤの伝説上のゴーレム、そしてホムンクルス等がある。ゲーテのホムンクルスについて論考を書き、ゲーテが当時の科学的発見をすぐさま作品内に組み込んだことを踏まえて、科学と文学の交錯という観点に着目する必要を認識した。

4) 神秘思想

亡命期デーブリーンの「自然哲学」の核にある神秘思想は、マクロコスモスとミクロコスモスの照応、およびキリスト教神秘主義から成る。内外の自然の一致はキリスト教神秘主義では「神との合一 (unio mystica)」と呼ばれ、『アマゾン』において、ヨーロッパからやってきたイエズス会士たちが南米のジャングルの中で理想郷を作ろうと格闘する様子は「神との合一」を再現しようという試みでもある。『一九一八年十一月』には神秘主義者のヨハネス・タウラーの幻像が主人公に顕現する。作品冒頭の舞台であるストラスブールがキリスト教神秘主義の一大興隆地であったことを踏まえると、主人公がドイツに戻るときに自宅のあるベルリンへ神秘思想を持ち帰ったと言える。そして主人公がドイツ革命の騒動を生き延びて放浪の予言者となることは、中世の神秘思想が時代を超えて、生活改善運動に流れ着いたことを表す。生活改善運動は現代に通じる生活様式を生み出したが、その流れの源には旧来の自然観が存すると判明する。

デーブリーンの「自然哲学」は、前世代の文学者たちの世界観を参考にして、最新の科学技術の進展を念頭に置き、亡命生活の中で、旧来の「自然学」を時代に即した形に書き改めたものである。彼は作品内でマクロコスモスとミクロコスモスの均衡を多角的に検討し、理想を追求する。そうした彼の努力が過酷な時代を生き延びるエネルギーになっていたのである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 時田 郁子	4. 巻 248・249
2. 論文標題 ヨーロッパと新世界ーデーブリーンの『アマゾン』	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 成城文藝	6. 最初と最後の頁 33 - 9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 時田 郁子	4. 巻 38
2. 論文標題 ホムンクルスの冒険 ゲーテ『ファウスト』第二部第二幕	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ヨーロッパ文化研究	6. 最初と最後の頁 91-116
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 時田 郁子	4. 巻 37
2. 論文標題 怪物と移動 - グリンメルスハウゼン『ドイツの冒険者ジンプリチムス』 -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 ヨーロッパ文化研究	6. 最初と最後の頁 129 - 152
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 時田 郁子	4. 巻 242
2. 論文標題 ピアーキの最期 - クライスト『拾い子』について -	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 成城文藝	6. 最初と最後の頁 36 - 51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----